

臨床で大切にしたいこと

ゆきよしクリニック

作業療法士 高野 友美

【筆者が大切にしている課題①】

患者さんが発信するさまざまな情報（特に非言語的な情報）をできるだけたくさん受け止めて、それを解釈し、どれだけ適切な対応ができるか。そして、その結果をわかりやすく患者さんにフィードバックして積み重ね、患者さんの元気と自信をいかに高めるか。

症例

Aさん(70代 男性)

<診断名>脳梗塞(左片麻痺)

- ・左片麻痺は重度で随意的な運動は困難。
- ・起き上がりは介助、座位は見守り必要。立ち上がり、移乗動作は全介助。
- ・コミュニケーションと認知機能は簡単な課題での理解可能。自分からは周囲と交流を持たず、時々拒否的な言動、危険行為が見られていた。

<入院時の希望>ものが食べられるようになること。
歩けるようになること。

リハビリ開始

担当OTが座位・立位動作の改善、トイレ動作の介助量軽減を短期目標に挙げていた。しかし、自分から意欲的に取り組める状態ではなく、希望もあまり語られなかったため、車椅子で散歩に出かけていた。一週間ほどすると、少しずつ拒否的な反応が見られるようになった。関わり方を工夫しているが、拒否的な反応は日に日に強くなっていった。

担当OT変更！

OT:「まだ起き上がるのも大変で、辛いでしょう？起こしてもら
うとき怖くありませんか？」

Aさん:「怖いよ。うまく出来ないし…。」

OT:「トイレを楽に行えるために、立ち上がりや立位の練習を
始めたいと思います。」

Aさん「歩くよりも手足を動かす練習をしたい。」

【OTが詳しく話を聞くと】

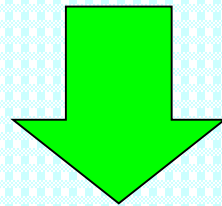
Aさん「怖いから…。」

その頃、積極的な態度は見られなかったが、誘導しながら動
作を一緒に行うと自発的に動いてくれる様子が見られた。

その後、歩行練習にも意欲的に取り組み、「けっこうできるよう
になった」と看護師に話していた。

なぜ、このような変化が見られたか？

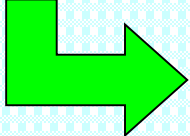
- ・相手の状態をよく観察し、具体的に言葉にして聞いてみた。相手がうまく言葉に出来ない部分、気づけないでいる部分を理解してあげることができた。
 - ➡Aさんと信頼関係を築ききっかけになった。
- ・こちらの考えを押し付けてしまわないように配慮し、治療内容を丁寧に説明し、希望として述べられたことの裏にある気持ちを受け止めるように心がけた。
 - ➡安心して動作が行える経験をしてもらった。
 - ➡恐怖心なく「自分でできるかもしれない」という自信に繋がった。



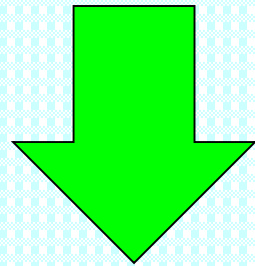
Aさんのペースに合わせた支持的な関わりが内面にある意欲を引き出し、意欲的な取り組みが本人様の自信につながった。

【課題① まとめ】

相手の立場や相手の視点に立ってみると、気づけることも多く、意欲や反応を引き出すことができる。そして相手がうまく言葉に出来ない部分、気づけないでいる部分を理解してあげて言葉として伝えて対処する。

 信頼につながる

 意欲につながる



患者さんに勇気や自信が生まれる

この人となら
やってみようかな

この人となら
頑張れそう

【筆者が大切にしている課題②】

様々な場面での
ストーリー性を大切にしたい。

【ストーリーとは？】

ストーリー

非常に長い期間にわたるもの

「患者さんが入院するまでのストーリー」と「入院中・退院後のストーリー」の2つが、より質の高い生活ができるためのストーリーを描くもの。

短い期間のもの

その日1日の中でのストーリー（リハビリでは1単位、2単位）。その短い時間の中でいかに患者さんの気持ちや身体を元気にしていくかというストーリー。

症例

Bさん(70代 女性)

<診断名>脳出血(右片麻痺)

<生活歴>

結婚後は、家業を手伝うことが忙しく、苦勞した生活が続き、神経質・引っ込み思案の傾向になっていった。ラクナ梗塞により、うつ的になり食事量が減少し、活動量が減少した。その後、認知症の症状がみられ始め、献立が決められなくなり、買い物できなくなるなどの症状がみられた。

<現症>

- ・左片麻痺は軽度。
- ・起き上がり、歩行は介助必要。危険行動があり、転倒の危険性が高い。
- ・食事は入院時、自力摂取が1～2割で、栄養状態は不良。
- ・高次脳機能面では、うつ症状と認知症に加え、見当識障害、記憶障害は重度。不安感が強く、活動性はかなり低下している。

リハビリ開始

ベッドに横になっているBさんの脇にしゃがんで、目を合わせて挨拶を行い、敵とみなされないように関係作りから始める。すると、会話が通じないながらも頷き、色々な話をしてくれる。

その後、トイレ誘導をリハビリに誘うきっかけとし、排尿後の手洗い、整髪、OT室でハンドクリームを塗ることを活動として取り入れた。

その後は、お迎えに行くと「来てくれたの？」と布団と広げて起き上がり、靴を履いてくれるようになっていった。そして、活動も服をたたんで、たんすに片付けたり、一緒に屋外の散歩に出かけて柿をもぎ、病棟に戻って他の方にふるまってもらったり、家族が持ってきてくれた愛犬の写真をベッドサイドに飾るため台紙に張る作業へと変化していった。元気がない日は、その写真の前で愛犬の話をしていると表情が柔らかくなる。またある日は、他の患者さんが調理を行っていたところに見に行き、試食に参加し、お好み焼きを「おいしい」といって全部食べることもできた。

ストーリー性を持たせたリハビリ(Bさんの場合)

- ・散歩に出かけたときに散歩の途中で見つけた柿の木から柿をもぎ取り、病棟に戻って皮をむいて他の方にふるまっていた。
- ➡短い期間のストーリー(リハビリでの40分)を考えた関わりができた。
人のために何かが出来たという「快」刺激を体験できた。
- ・家族が持ってきてくれていた愛犬の写真の台紙作りでは、一緒に行っていただけでなく完成を見て喜んでくれ、元気がない日は、その写真の前で愛犬の話をしていると表情が柔らかくなる。
- ➡「患者さんが入院するまでのストーリー」を生かして関わった。
無機質な病院の中でその人らしい環境をつくることにつながった。
- ・食欲がなく、栄養摂取ができていなかったが、ある日他の患者さんが調理を行っていたところに見に行き、試食に参加し、お好み焼きを「おいしい」といって全部食べることもできた。
- ➡短い期間のストーリーを考えた関わりができた。
調理をしている間の臭い、焼ける音、出来立ての湯気などに五感を刺激されて「おいしそう」と感じる事が出来た。

【課題②まとめ】

人は「快」の感覚を行動の動機付けとしている。「嬉しい」とか「楽しい」という「快」の感覚をたくさん知ってもらい、いきいきと生きていけるよう支援していくことが大切。そのためには、その方の「過去のストーリー」を知ること、そして「これからのストーリー」を考えていくことが重要。

ゆったりした幸せいっぱいストーリー展開はなかなか難しいかもしれない。

でも・・・

涙あり、挫折あり・・・

愛があふれるストーリーが

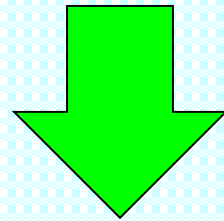
展開できればいい！！！！

【筆者が大切にしている課題③】

OTのスタッフだけが努力しても不分で、少なくとも職場のスタッフの総力を挙げないと、いいリハビリテーションは提供できない。

エピソード

患者さんと関わる上で苦手とする一つが重度の方の移乗動作。ベッドサイドやトイレで、苦勞しながら患者さんの移乗をしている場面に出くわすと「大変そうですね」と声をかけている。「方法教えてよ！」と頼まれ、「こ～するんですヨ」と得意気に方法を伝える。こんな感じで病棟内はいつでもミニカンファレンスの場になる。



チームで仕事をするには・・・

- ①チーム内で自分の役割を果たすために常に最高の水準を保つ努力を怠らない。
- ②一緒に仕事をする職種の長所・短所を知り、それを認め合い、相手が得意なところはしっかりと学び、理解しておく必要がある。

【課題③ まとめ】

自分がチームの中でどのようにみられているかを客観的に捉え、仲良く楽しくの「協働」ではなく、患者さんが心も身体も元気になるための「協働」はメンバー全員がたくさんの汗を流さないと簡単にはつukれないものである。